



ネルヴァルとバレエ = パントマイム 『悪魔の恋』

著者	間瀬 玲子
雑誌名	人間文化研究所年報
号	26
ページ	93-107
発行年	2015-08-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1219/00000494/

ネルヴァルとバレエ=パントマイム 『悪魔の恋』

間瀬 玲子

Nerval et *le Diable amoureux* (ballet-pantomime)

Reiko MASE

I. 序

ジェラルール・ド・ネルヴァル (1808–1855) Gérard de Nerval とジャック・カゾット Jacques Cazotte 『悪魔の恋』 *Le Diable amoureux* の深い関わりはつとに有名である。しかしネルヴァルがバレエ 『悪魔の恋』 に関する評論を『プレス』紙 *La Presse* に書いたことはあまり注目されていない。

本論文ではバレエ 『悪魔の恋』 と表記することにする。フランスのバレエ振付家ローラン・プティ (1924–2011) プチと表記する場合もある) Roland Petit の公式サイトにはバレエ *Le Diable amoureux* がプティの振付により1989年に上演されたことが書かれている。台本はジャン・アヌイ Jean Anouilh とジャック・カゾットを元にしてプティが作成、主要登場人物はアレッサンドラ・フェリ Alessandra Ferri、ジャン・ブロエックス Jan Broeckx、ジャン＝シャルル・ベルシェール Jean-Charles Verchère が演じている。日本ではこのバレエが『恋する悪魔』と訳されている。バレエの登場人物と粗筋を調べると、本論文でこれから論じようとしている1840年にパリで上演されたバレエとプティの『恋する悪魔』は内容的に違うことがわかったので、本論文ではバレエ 『悪魔の恋』 と表記する。

本論文ではバレエ作品 『悪魔の恋』 に関する劇評、バレエ作品のパンフレット、そして台本を比較検討し、ネルヴァルがバレエからどのような影響を受けたかを検証したいと考えている。

バレエ 『悪魔の恋』 公演時のプログラム、台本、バレエの舞台の雰囲気を感じることができる数多くの版画の電子テキストを入手した。カゾットの 『悪魔の恋』 の影響を受けたバレエということになっているが、登場人物も内容も相当違っている。本論文ではカゾットの 『悪魔の恋』 にも言及する。ネルヴァルの文学作品生成過程においてバレエ 『悪魔の恋』 及び小説 『悪魔の恋』

がどのような影響力を持っていたかを実証したいと考えている。

II. ジャック・カゾット『悪魔の恋』

ジャック・カゾット（1719～1792）は18世紀フランスの作家であり、主要作品は『悪魔の恋』（1772）である。（1）悪魔ベエルゼビュート Béelzébut が美女ビヨンデッタ Biondetta に変身し、主人公の青年アルヴァーレ Alvare に恋をし、思いをとげ、本性をあらわし、立ち去るといふ物語である。（2）

『悪魔の恋』は1772年に初版本が出版された。7枚の図版が収録されており、そのうちの1枚は楽譜である。図版に描かれている悪魔はあまり怖さを感じさせない。どちらかと言うと「かわいい悪魔」である。アルヴァーレと悪魔の大きさがあまり変わらないことを特記しておく必要がある。カゾットの死後、1815年にバスティヤン社 Bastien によりカゾットの全集が刊行された。4巻の全集のうち『悪魔の恋』は第1巻に収録された。第1巻の最後に「悪魔の恋、1772年に刊行されたこの作品の初版だけにあるオリジナルの図版付」と書かれているように、7枚の図版がすべて収録されている。（3）その後『悪魔の恋』の校訂版は何度も刊行された。

III. バレエ『悪魔の恋』について

1840年9月23日にパリのオペラ座（Académie Royal de Musique Le Peletier 当時のオペラ座）で3幕8景のバレエ『悪魔の恋』 *Le Diable amoureux* が上演された。サン＝ジョルジュ Saint-Georges とマジリエ Mazilier 作、ブノワ Benoist とルベル Reber が音楽を担当した。（4）後に詳しく言及するが、ネルヴァルはこのバレエに関する評論を『プレス』紙 *La Presse* に発表した。フランス国立図書館電子テキストサイト Gallica にはこのバレエに関する貴重な資料が収録されている。まずバレエのプログラムである。（5）ネルヴァルがプログラムを参照した可能性はある。フランス国立図書館の目録に記載されている事項とプログラムそのものを比較すると多少違いがある。また電子テキストそのものがあまり鮮明ではない。プログラムの最初のページには登場人物と俳優が記載されている。地獄の王はベルゼビュート Belzébuth、主人公の伯爵はフレデリック Frédéric、女性の悪魔ユリエル Urielle、伯爵の乳姉妹リリア Lilia が主要メンバーである。2ページ目から4ページ目までは第1幕から第3幕までの粗筋が書かれている。なおプログラムにはカゾット『悪魔の恋』の事は一切書かれていない。バレエ『悪魔の恋』と小説『悪魔の恋』を比較すると、多少綴りが違うがベルゼビュートが登場すること以外は登場人物も違うし、粗筋も違う。

次に重要な資料はバレエの台本である。（6）ネルヴァルが台本を読んだという証拠はないが、この台本によってバレエの内容の詳細を理解することができた。なお台本にもカゾット『悪魔の恋』のことは記載されていない。

ネルヴァルの後の文学作品に登場するテーマという観点から台本を眺めてみると、まず注目すべきなのは第1幕第2景の（塔）tourの中の古いゴシック様式の図書室にあった埃のかぶった数冊の本である。この古い塔は第3幕第7景で再登場する。第1幕第2景第3場で主人公フレデリックが古くて大きい埃だらけの（手稿）manuscritを広げる。そこには（魔法の文字）caractères magiquesが書かれている。彼の教育係オルタンシウス Hortensiusは「これらの（秘法の文字）caractères cabalistiquesがフレデリックを痛めつける」と言っているようである。しかしフレデリックは鼻でせせら笑い、円を描き、真ん中に身をおく。この第3場では（地獄の本）le livre infernal,（魔本の本）le livre magiqueという表現もある。

第1幕第1景第3場でフレデリックが自分の指にはめていた（豪華な指輪）riche anneauをリリアに贈る。第1幕第1景第5場では、リリアがフレデリックの方に駆け出した時、彼女が受け取ったあの（豪華な指輪）riche bagueを興奮気味に彼に示すという場面がある。

第3幕第5景では薄暗い（洞窟）grotteを舞台としている。第3幕第5景第1場でベルゼビュートが洞窟の真ん中に立っている。そこに女性の悪魔ユリエルが登場する。

第3幕第6景ではエスファハーン Ispahan（現在ではイランの都市）の豪華な市場または奴隷市場が舞台となっている。そして第3幕第6景第1場では広大な（隊商宿）caravansérailが登場する。これらのテーマはネルヴァルのその後の数々の作品に登場する非常に重要なテーマとなる。

バレエ『悪魔の恋』に関連する図版がGallicaに数多く収録されている。まず衣装のデッサン画家ポール・ロルミエ Paul Lormier (1813-1895)の12枚の水彩画が残されている。衛兵、貴婦人、貴族、漁師、農民、商人、第2幕の貴婦人、ハレムの女、オルタンシウス、ファビオ、大臣、ベルゼビュートである。これらの水彩画を詳細に検討するとバレエが醸し出す雰囲気や想像することができる。(7) これ以外にもGallicaには記名または無記名の図版が残されている。ポルカのダンス（チェコの民族舞踊）の版画、女性の悪魔ユリエルの愛らしい青色の服装と特徴のある帽子を描いたエッチング、青と黄色に赤いリボンがアクセントになっている衣装を着たりリアを描いたエッチング、3幕で大臣が女性の悪魔ユリエルを誘惑する場面を描いた版画などが目を引く。

ネルヴァルは『プレス』紙で二度バレエ『悪魔の恋』について言及している。一つ目は『プレス』紙1840年8月3日号である。(8) この記事はバレエが上演される前に発表されている。プレイヤード版の編者は注において「ジュエール（ネルヴァルのこと）が言及しているのはオペラ座で創作されようとしているバレエではなく、ジャック・カゾットの作品である」と指摘している。(9) ここで重要なことはオペラ座で上演されるバレエ『悪魔の恋』はカゾットの影響を受けたことがネルヴァルにとって当然の事であったということである。またネルヴァルはこの時点ではバレエの登場人物や粗筋についての知識を持っていなかったのも事実である。

次にネルヴァルは『プレス』紙1840年10月5日号に再度バレエ『悪魔の恋』についての記事を掲載した。

(10) ネルヴァルはこのバレエを鑑賞した後に記事を執筆している。ネルヴァルは記事の冒頭でバレエと小説を比較すると、バレエは小説から二つか三つの状況しか借用していないことを明言している。それではまずダンサーに注目してみよう。まずベルゼビュート役のモンジョワ氏 Montjoie とブラカッチオ役（海賊の頭領）のシモン氏 Simon について言及している。二人に関してネルヴァルは1832年6月20日当時のオペラ座で初演、コラーリ Coralli 作バレエ・オペラ『誘惑』 *La Tentation* と関連づけて言及している。ネルヴァルが劇評執筆のために鑑賞したのは1838年5月4日再演『誘惑』の《地獄》の幕であった。『プレス』紙1838年5月21日号で記事として発表している。この記事の中ではシモン氏について言及しているが、モンジョワ氏に関する記述はない。(11)

『プレス』紙1840年10月5日号のネルヴァルの記事の中で目立つのはダンサーのポーリーヌ・ルルー嬢 Pauline Leroux を短い記事の2か所で激賞していることである。その2箇所目を引用してみよう。

On a remarqué des pas fort gracieux, notamment un pas de trois où danse Mlle Blangy, si correcte et si séduisante ; deux pas de Mme Pauline Leroux, l'un qui rappelle avec bonheur la célèbre valse de *Faust*, l'autre destiné à séduire le luxurieux vizir du troisième acte, et qui séduit fort le public par contrecoup. (12)

人々とはとても優雅な踊りに注目した。特にとても正確でとても魅力的なブランジー嬢が躍る3人の踊りに注目した。そしてポーリーヌ・ルルー嬢の二つの踊り。一方は幸いにもあの有名な『ファウスト』のワルツを思い起こさせる。他方は3幕の淫蕩な大臣を誘惑する定めであり、結果的には観客をととても魅了している。

最後に書かれた3幕の場面の版画が Gallica に収録されている。(13) エリ氏 Élie が演じている大臣は大きく手を広げ、目を大きく開いている。ユリエル役のルルーが上目づかいで、しなを作っている。このような版画が残るぐらい有名になったシーンであると思われる。ルルーはかなり有名なダンサーである。しかしネルヴァルは、『悪魔の恋』の劇評だけで彼女を言及している。さて文中に出てくるブランジー嬢はプログラムには名前が記載されていない。そこですでに紹介した台本を見ると、主要登場人物ではなく、3人の踊り Pas de 3に名前が記載されている。ネルヴァルは『プレス』紙1840年6月1日号でかの有名なバレエ『ラ・シルフィード』 *La Sylphide* の再演を取り上げている。そこでネルヴァルはブランジー嬢の急速な進歩を絶賛している。(14) その印象が強かったので、『悪魔の恋』におけるブランジー嬢の演技に注目したのだと考えられる。

さて特筆すべきことは、ネルヴァルが『プレス』紙1840年10月5日号の記事の中でバレエ『悪魔の恋』の粗筋を比較的詳しく紹介していることであろう。ネルヴァルが『プレス』紙の記事の中で書いた粗筋の箇所を全文を引用すると非常に長くなってしまっているので、箇条書きにして整理し

てみよう。また重要な単語は強調する。またすでに述べたプログラムや台本との違いにも充分注意を払いたい。なおネルヴァルはバレエの幕、景、場に関する記載を行っていない。数字はネルヴァルの文章の四つの段落分けに対応している。

- ① 高等娼婦フェーベ Phœbé の宴。フェーベと主人公フレデリックは愛人関係にある。フレデリックは彼女のことをもはや好きではない。フレデリックは美しいリリアに関心が移り、〈豪華な指輪〉riche anneau (プログラム及び台本と同じ単語を使用)を贈る。フェーベは怒っている。
- ② フレデリックは祖先の〈古い城〉vieux château (プログラムでは古い塔 vieille tour、台本では塔)にこもり、読書に慰めを求める。〈奇妙な手稿〉manuscrit bizarre が彼の手落ちる (プログラムでは判読不能な文字で書かれた古い手稿 antique manuscrit、couvert d'hieroglyphe、台本では古く、大きく埃まみれの手稿 vieux et large manuscrit poudreux)。フレデリックは〈降霊の決まり文句〉formules d'évocation (プログラムと台本では〈呪い文〉conjuración)を発する。悪魔が登場し、女悪魔を彼のために用立てる。女悪魔は24年間地上のすべての快樂を彼にもたすことを任務とする。(プログラムと台本には24年間という期間は書かれていない)。
フレデリックは相変わらずリリアの事を思っている。高等娼婦の計略から逃れ、海辺の村にリリアと結婚しに来る。ところがフェーベは自分が雇った海賊にリリアを誘拐させる。小姓ユリエルが2倍の代金を支払って、リリアを誘拐し、花嫁の服を着る。フレデリックが式典に婚約者を探しにくる。岩の上の礼拝堂で婚約者が敷居をまたぐと、雷が鳴り、地獄の娘を罰する。
- ③ 悪魔は、フレデリックの魂を戻すならば、彼女をもはや地上に送り返したくない。フレデリックは婚約者を探しに〈東方〉Orient (プログラムと台本ではエスファハーン Ispahan)に出発する。リリアとフェーベが奴隷市場で売られている。フレデリックは買い戻そうとするが、年老いた〈大臣〉vizir が競り上げる。大臣が支払い、リリアを宮殿に連れて行こうとする。ユリエルがフレデリックに〈地獄落ち〉damnation にサインすることを提案する。フレデリックは同意し、リリアは戻された。
- ④ 結婚式の夜、ユリエルが〈契約書〉pacte を持って現れる。フレデリックは懇願するが、無駄だった。今度は彼のほうが奴隷となる。不幸なフレデリックは短刀で自殺しようとする。ユリエルは愛に寛大で、〈羊皮紙〉parchemin を焼き、フレデリックに新婦 (リリア)を返した。〈契約書〉が燃え尽きるにつれて、ユリエルの地上の命が消える。裏切りのせいで悪魔の逆鱗に触れ、ユリエルの命は地獄に落ちる。リリアが黄金の十字架を投げ、ユリエルの献身により浄化された魂が天上に登る。

ネルヴァルの文章ではわかりにくいのはユリエル Uriel だが、プログラムや台本では Urielle と記載されている。女性の悪魔のことである。

ここで特記すべきことは、ネルヴァルがプログラムや台本の第3幕第5場に登場する〈洞窟〉を記事の中で言及していない。字数が制限されているとはいえ、言及しなかったことは記憶に留めるべきであろう。次にプログラムや台本ではエスファハーンとはっきりと都市名が明記されているのに、ネルヴァルは東方という広範囲な地域名に変更してしまった。

以上のようにカゾット『悪魔の恋』とバレエ『悪魔の恋』の登場人物及び粗筋は違うと言ってもよい。ネルヴァルがバレエ『悪魔の恋』の粗筋を書かなければ、『プレス』紙の読者には内容は伝わらない。しかしネルヴァルはバレエを見て、読者に内容とダンサーの踊りの良さを伝えるために、字数制限の中で上手に粗筋を書いた。

上記の②の箇所の一部に関して、ネルヴァルの記事とプログラムのフランス語の文章と翻訳を引用して確認してみよう。

Retiré dans le vieux château de ses pères, il cherche des consolations dans la lecture. Un manuscrit bizarre lui tombe sous la main ; il contient des formules d'évocation que Frédéric prononce par curiosité. (15)

祖先の城に引きこもり、彼（フレデリック伯爵）は読書に慰めを見出す。変わった手稿がたまたま手に入る。それはフレデリックが好奇心で発した降霊の決まり文句を含んでいる。

すでに多少言及したが、ネルヴァルの後の文学作品に少なからず影響を与えた場面である。古い城、そして図書室、そこで見つけた手稿はネルヴァルの興味をそそったと考えられる。それではプログラムではこの場面はどのように描かれているのだろうか？

Frédéric et le docteur s'entretiennent de la triste position du comte, Hortensius lui conseille de lire pour se distraire, et lui présente divers ouvrages que son maître rejette avec dédain ; enfin un antique manuscrit, couvert d'hiéroglyphes, tombe sous la main de ce dernier ; il y trouve une conjuration dont il veut tenter l'effet. (16)

フレデリックと医師は伯爵（フレデリック）の悲しい状況について話し合っている。オルタンシウスはフレデリックに、気晴らしをするために、読書することを勧め、彼の主人（フレデリック）が軽蔑して投げ出した色々な作品を見せた。ついに判読不能な文字で満ちた古い手稿がたまたま手に入る。彼はそこにその効果を試みたいと思うような悪魔祓いを見つける。（第1幕第2景第3場）

この二つの文章を比較すると *tombe sous la main* たまたま手に入るという表現が同じである。またすでに言及したように〈豪華な指輪〉もプログラムとネルヴァルの記事では同じ単語を使っ

ている。それだけでネルヴァルがプログラムを見て記事を書いたとは言えない。逆に言うとネルヴァルはバレエの劇評の大半を自力で書いたと言っても過言ではない。

またネルヴァルがルルーを激賞した文書の中の《ファウストのワルツ》も私たちにヒントを与えてくれる。プレイヤッド版の編者は注で「ネルヴァルが『悪魔ロベール』のワルツと混同しない限り、アダンによって作曲された最初のワルツへの言及の可能性。『1830年憲章』紙の無署名の文化欄記事が1836年12月17日に『ファウストのワルツ』を言及していた」と書いている。(17)しかしあくまで可能性であり、確かな事であるとまでは言いきれない。

ここでネルヴァルの頭の中でゲーテ Goethe の『ファウスト』 *Faust* そのものが心をよぎったと言ったほうが確かではないであろうか。ネルヴァルがゲーテの『ファウスト』を翻訳したことはあまりにも有名だからである。ネルヴァルが『ファウスト』第一部の翻訳に着手し完成したのは1827年だと言われている。そして1840年には『ファウスト』（第一部と第二部）を出版した。『悪魔の恋』を見ながら、『ファウスト』を想起しても不思議ではない。(18)すでに述べたように、ネルヴァルは『プレス』紙1840年10月5日号の記事の中で女性の悪魔がフレデリックにもたらず地上のすべての快樂の期間を24年間と書いている。ゲーテの『ファウスト』ではメフィストフェレスとファウストとの間では契約期間などは定めていない。24という数字は以下の場面で出現する。それは『ファウスト』第1部「書齋」の場面のメフィストフェレスの言葉である。ネルヴァルのフランス語訳を引用してみよう。

Si tu possèdes six chevaux, leurs forces ne sont-elles pas les tiennes ? tu les montes, et te voici, homme ordinaire, comme si tu avais vingt-quatre jambes. (19)

もし君が六頭の馬を持っていたら、それらの力は君のものではないだろうか？君が力を見せたら、あたかも24本の足を持った普通の男だ。(上記の仏訳を日本語に翻訳した。『ファウスト』の原文の日本語訳とは少し違う)

ゲーテの『ファウスト』そのものに24本と書かれているので、ネルヴァルの創作ではない。より重要な事は『ファウスト』ネルヴァル訳1840年版に『ファウスト伝説』*LÉGENDE DE FAUSTE* (ウィドマン著 Widman、パルマ・カイエ Palma Cayet によって16世紀にフランス語に翻訳された) (最後にEの文字がつく) が収録されていたことである。その文章の中に24年間という表現が数か所出てくる。そのうちの一箇所を引用してみよう。

…je lui ai promis et lui certifie, que d'ici à vingt-quatre ans, de la date de ces présentes ...
(20)

私はこれらの本状の日付、今から24年間を彼に約束し、保証した (後略)。

元々のファウスト伝説ではファウストとメフィストフェレスとの間では24年間という契約期間を設けていたのである。このことをネルヴァルは熟知していたはずである。つまりネルヴァルはゲーテの『ファウスト』というよりも、彼自身のフランス語訳に掲載されたファウスト伝説に引きずられて、『プレス』紙1840年10月5日号の記事の中にプログラムにも台本もない〈24年間の地上の快樂〉と書いてしまったのではないだろうか？『プレス』紙の読者やバレエ関係者から文句が出て当然の改変である。また『ファウスト伝説』にもベルゼブブ Belzebub が数カ所出てくる。(21) ベルゼブブのフランス語形がベルゼビュートである。

そしてこの1840年には後に『東方紀行』 *Voyage en Orient* (1851年) として刊行される作品の元となる記事を発表している。すでに述べたようにバレエ『悪魔の恋』のプログラム及び台本でははっきりとエスファハーンという都市名が書かれている。しかしネルヴァルの記事では〈東方〉 *Orient* と書かれている。そのほうが『プレス』紙の読者に伝わりやすいという理由かもしれない。もうひとつの理由は、ネルヴァルの頭の中ではエスファハーンではなく、『東方紀行』執筆計画が頭をよぎり、*Orient* という単語が頭に浮かんでしまったのではないだろうか？なおネルヴァルのその後の人生ではエスファハーンとは縁がない。

またすでに引用した『ファウスト』ネルヴァル訳(1840年版)に収録された「ファウスト伝説」ではメフィストフェレスを「東方における地獄の王子の召使い」*valet du prince infernal en Orient* と表現している。(22) この引用は先ほどの「24年間」と全く同じページである。それを偶然と片付けるわけにはいかないと考える。

IV. カゾット『悪魔の恋』とネルヴァルとの関わり

さてここでネルヴァルとカゾット『悪魔の恋』との関わりを整理してみよう。1845年にネルヴァルの序文付のカゾット『悪魔の恋』が出版された。(23) 本論文を執筆するに際し、1845年に出版された『悪魔の恋』の現物を入手した。また念のために数種類の電子テキストも入手した。また数冊の本の現物も入手して比較検討した。現物を検討して実感したことは、序文、本文と多数の挿絵によって構成された作品であるということである。表題には200枚の挿絵が掲載されていると書かれている。挿絵は本文の理解を深めてくれる。第2章でベエルゼビュートが駱駝(chameau)の姿で登場し、主人公アルヴァーレを恐怖のどん底に突き落とす。そして怪物は「何ぞ御用？」*Che vuoi ?*とアルヴァーレの問いに答えるのであった。この場面は1845年版の図版では怪物の頭の大きさがアルヴァーレの全身と比較しても異常に大きい。そして第18章でまたしてもアルヴァーレの前に駱駝が現れる。やせ細った巨大な怪物の足が異常に長く、主人公を威圧している。

ネルヴァルの序文はカゾットを非常にコンパクトに纏めている。その手腕には敬意を表したい。本論文の目的は序文の内容の分析ではないので、ここでは序文の中で『悪魔の恋』の演劇化について書かれていることを指摘したい。

... son Diable amoureux fut représenté aussi sous cette forme avec le titre de l'Infante de Zamora (24) (1845年版では作品名はイタリック体ではない)

彼の『悪魔の恋』もまたこの形式で『サモラの王女』の題名で上演された。

ネルヴァルの記述はこれだけである。『サモラの王女』(サモラはスペインの都市名)に関してネルヴァルがどの程度の知識があったのかは不明である。プレイヤッド版の注によるとパジエッロ Paisiello 音楽、フラムリー Framery 台本の4幕物の喜劇である。(25) 幸いにも Gallica に台本の電子テキストが収録されている。台本の冒頭に登場人物名が記載されている。『サモラの女王』は主人公の女王が変装し活躍をした後、最後はめでたく終わる喜劇である。この「変装」が『悪魔の恋』から借用したことになっている。なお『サモラの王女』にはカゾット『悪魔の恋』のことはどこにも書かれてはいない。

ネルヴァルはこの序文の中でカゾットが存命中の演劇化しか言及しなかった。それは文章の流れからすると当然のことであろう。ここで19世紀のパレエや演劇作品を言及することができなかったのは当たり前だと考えている。

さてネルヴァルは『悪魔の恋』1845年版刊行後に序文を各雑誌に分散して掲載した。プレイヤッド版の編者がまとめている。(26) それを土台として実際に入手した電子テキスト版の調査結果を列挙してみよう。

『アルチスト』誌 *L'Artiste* 1845年4月20日号 *Le Diable amoureux de Cazotte I*

(『悪魔の恋』1845年版の序文から2枚と本文から1枚の挿絵を転用している)

『アルチスト』誌 *L'Artiste* 1845年5月11日号

Le Diable amoureux II Contes et chansons de Cazotte

(『悪魔の恋』1845年版の序文から8枚の挿絵を転用している)

『シルフィッド』誌 *La Sylphide* 1845年6月29日号

(『悪魔の恋』1845年版の序文から2枚、本文から1枚の挿絵を転用している)

『絵入り有益予言年鑑 1847年版』*Almanach prophétique pittoresque et utile pour 1847*

De l'esprit prophétique

Anecdotes prophétiques. Jacques Cazotte

(両方とも独自の挿絵を掲載している。ネルヴァルが書いた記事には挿絵画家の名前も明瞭にわかるものもある。例えばヴェルニエ CH. Vernier である。)

ネルヴァルは雑誌記事においても、1845年版の本と同様に、文章に挿絵を添えて、読者の理解を深めている。よって絵が与える効果を見捨てることはできない。『アルチスト』誌と『シルフィッ

ド』誌では文章の冒頭は美しい飾り文字が使われている。飾り文字と本文の挿絵のおどろおどろしさのコントラストはとても興味深い。

そして最後にネルヴァルは『幻視者』に「ジャック・カゾット」を収録した。1852年ヴィクトール・ルクー社から『幻視者』が出版された。本書では「ジャック・カゾット」だけではなく、全体的に挿絵は全く収録されていない。それは非常に残念なことである。(27)

V. 演劇『悪魔の恋』について

ネルヴァルがバレエ『悪魔の恋』の劇評を書いた前後に『悪魔の恋』が演劇化されているかどうかをフランス国立図書館電子テキストサイト Gallica を使って調査した。現時点では二つの演劇作品の存在を確認した。これらに関するネルヴァルのコメントの存在は確認していない。

(1) 軽喜劇『悪魔の恋』 1幕 *Le Diable amoureux*, vaudeville en 1 acte 1836年9月28日 パリ・ヴォードヴィル劇場 Théâtre du Vaudeville で初演

上記のバレエ『悪魔の恋』よりも前に上演された軽喜劇である。作者はサンチヌ Saintine、製作者はエチエンヌ・アラゴ Étienne Arago である。ネルヴァルはサンチヌに関して言及したことはあるが、本作品への言及はない。(28) 本作品の台本によると舞台はスペインのトレドから約8キロの位置にあるオレアスである。(29) Gallica にはエステル(女性主人公) Esther を演じたファルギュイユ嬢 Fargueil の版画を収録している。ピンクと黒を基調としたドレスはとても魅力的である。また頭からウエストまで続くピンクの飾りもアクセントになっている。イニゴ・モスティコ役(ギター先生) Inigo Mostico 役を演じたフィリップ Philippe の版画も収録されている。こちらは赤と黒を基調とした衣装である。赤と白の帽子が目を引き。本作品は上記の二人以外にセバステイアン・ヌネ(フランシスコ会僧院の修道士) Sébastien Nunez をエミール・テニー Emile Taigny が演じている。この演劇は3人の登場人物により演じられている。

ネルヴァルが私財を投じて発行した雑誌『演劇界』1836年版には本作品に関する無著名の劇評が掲載されている。なお1836年版発行時にネルヴァルがどの程度関与したかはわからない。劇の粗筋と登場人物は、小説『悪魔の恋』とは全く違う。悪魔とみなされたエステルがそうではなかったことが判明したという話である。またカゾットの綴りも間違っている。劇評では上記の三人の俳優を褒めている。(30)

(2) 幻想劇『悪魔の恋』 2幕3景、*Le Diable amoureux*, pièce fantastique en 2 actes et 3 tableaux 1840年12月 パリ、サン＝タントワヌ門劇場 Théâtre de la Porte Saint-Antoine

1840年オペラ座(当時のオペラ座)で同名で上演されたバレエを真似た演劇である。フレネッ

クス嬢 Fréneix (ユリエル Urielle) とトレヴェ Treveys (ベエルゼビュト Beelzebuth。版画の綴りを転記) が出演した。Gallica にはこの二人を描いた版画が1枚収録されている。残念ながらこの版画は白黒である。上半身裸のベエルゼビュトが跪いているウリエルを威嚇している姿が描かれている。ネルヴァルはフレネックスを他の作品に関して言及しことがある。

繰り返しになるが上記の二つの演劇化に関しては、ネルヴァルのコメントがあるわけではない。ネルヴァルが劇評の世界で活躍中に二つの作品が上演されたことは記しておいてもよいと考えた。

VI. 結論に代えて

ネルヴァルがカゾット『悪魔の恋』の序文を書いたことはよく知られている。しかしそれよりも5年も前に『悪魔の恋』を題材としたバレエ『悪魔の恋』が上演され、その劇評をネルヴァルが執筆したことはそれほど有名ではないと考える。すでに述べたように本論文を執筆するに際し、バレエ『悪魔の恋』のプログラム、台本、そして舞台衣装画の電子版を入手できた。劇評とこれらの題材を突き合わせて検討した結果、ネルヴァルは自らの文学作品生成に劇評執筆をうまく利用したことがよくわかる。些細な変更とも言えるかもしれないが、ネルヴァルにとって都合のよい改変を記事内で行っていることも本論文で論証した。

フランス国立図書館電子テキストサイト Gallica にはネルヴァルの劇評が掲載された『プレス』紙や『アルチスト』誌のみならず、当時の舞台関係の資料が収録されている。21世紀の今、当時上演されたバレエ『悪魔の恋』や他の二つの演劇作品と全く同じものを見ることは叶わないかもしれない。しかしプログラム、台本、舞台装置、舞台衣装画は私たちの想像力をかきたててくれる。今後も同様の作業を続行することにより、ネルヴァルの文学作品創造のプロセスを解明したいと考えている。

注

- (1) カゾット『悪魔の恋』の翻訳は、ジャック・カゾット、渡辺一夫、平岡昇 訳『悪魔の恋』世界幻想文学大系第1巻、国書刊行会、昭和51年として出版された。本論文を執筆するに際し、渡辺一夫「カゾットのこと」と平岡昇「ジャック・カゾットの生涯と作品」を参考にした。また作品の題名の日本語訳は本書に準拠した。後にカゾット、渡辺一夫、平岡昇 訳『悪魔の恋』バベルの図書館 第19巻、国書刊行会、1990年として出版された。月報に収録された田中義廣「カゾットとマルチニスム」を参考にした。澁澤龍彦 編『変身のロマン』学習研究社、学研 M 文庫、2003年に収録されたジャック・カゾット、渡辺一夫・平岡昇 共訳「悪魔の恋」及び澁澤龍彦「編集後記」(pp. 357-358)を参照した。

- (2) 『世界の奇書101冊』自由国民社、昭和53年と由良君美 著・監修『世界のオカルト文学幻想文学総解説』自由国民社、昭和57年を参考にした。
- (3) Jacques Cazotte, *Le diable amoureux*, Nouvelle espagnole, Naples, [i.e. Paris, Le Jay], 1772はフランス国立図書館電子テキストサイト Gallica に収録されている。ナポリは偽りであり、実際はパリで発行された。全集は Jacques Cazotte, *Œuvres badines et morales, historiques et philosophiques de Jacques Cazotte*, tome premier, Paris, Jean-François Bastien, 1817である。1772年の初版本の図版（楽譜も含めて7枚）と1817年発行の全集の図版を比較してみた。全集版の図版は多少手を入れた箇所がある。特に楽譜は文字を書き直していると考えられる。
- なお本論文を執筆するに際し、Jacques Cazotte, *Le diable amoureux*, édition critique par Yves Giraud, Paris, Honoré Champion, 2003に記載された初版本から全集までの変遷を参考にした。また Jacques Cazotte, *Le Diable amoureux*, chronologie, préface, bibliographie et notes par Max Milner, Paris, Flammarion, coll.《GF》, 1980の書誌を参考にした。本書の表紙は1772年の初版の挿絵をミシェル・オットフェール Michel Otthoffer が彩色した絵が採用されている。悪魔のかわいさが増している。Jacques Cazotte, *Le Diable amoureux*, préface, notice et notes de Georges Décote, Paris, Gallimard, coll.《folio classique》, 1981に記述されている書誌も参考にした。Romanciers du XVIII^e siècle, tome II, Paris, Gallimard, coll.《Bibliothèque de la Pléiade》, 1965, pp. 303-378に収録された『悪魔の恋』の注 (pp. 1940-1955) に記載されている詳細な書誌を参考にした。
- (4) サン＝ジョルジュ (1799-1875) は劇作家、オペラ、バレエの台本作家であった。オペラでは『連隊の娘』*La Fille du régiment* (1840 (ドニゼッティ作曲)、バレエでは『ジゼル』*Giselle* (1841)、『海賊』*Le Corsaire* (1856) などの多数の作品を残した。マジリエ (1801-1868) はバレエダンサーであり振付師であった。『パキータ』*Paquita* (1846) 『海賊』*Le Corsaire* (1856) などの振付を担当した。
- (5) *Le Diable amoureux, ballet-pantomime en trois actes*, programme de MM. Saint-Georges et Mazilier, musique de MM. Réber et Benoist, Paris, Malteste, 1840. このプログラムでは Réber と表記されている。デブラ・クレイン、ジュディス・マックレル、鈴木晶監訳『オックスフォード バレエダンス事典』平凡社、2010年、p. 520の「マジリエ、ジョゼフ」の項目では「《恋する悪魔》(音楽 E. プノワと H. レベール、1840)」と書かれている。また「バレエ=パントマイム」ballet-pantomime の項目では「ダンスとマイムの両方を十分に用いたため、このように呼ばれる。」(p. 405) と書かれている。なおこの翻訳の原書である Debra Craine & Judith Mackrell, *The Oxford Dictionary of Dance*, second edition, Oxford, Oxford University Press, 2010の《Mazilier, Joseph》《ballet-pantomime》も参考にした。
- (6) Saint-Georges et Mazilier, *Le Diable amoureux*, ballet pantomime en trois actes et huit tableaux, Bruxelles, Lelong, 1843を入手して、バレエの内容を把握することに努めた。
- (7) Paul Lormier, *Le diable amoureux*, douze maquettes de costumes par Paul Lormier, 1840.
- (8) 『プレス』紙は Gallica に収録されている。*La Presse*, Lundi 3 août 1840. 念のためにプレイヤッド

版で確認を行った。Gérard de Nerval, *Œuvres complètes*, tome I, Paris, Gallimard, coll. 《Bibliothèque de la Pléiade》, 1989, pp. 618-625. 以下ネルヴァルのこの巻を PL. I と略す。

- (9) PL. I, p. 1723.
- (10) *La Presse*, Lundi 5 octobre 1840. PL. I, pp. 673-678.
- (11) *La Presse*, 21 mai 1838. PL. I, p. 406. バレエ『誘惑』の初演の時の資料は Gallica に多数収録されているが、1838年の再演の時の資料を見つけることはできなかった。モンジョワ氏 Montjoie は1832年6月20日初演（当時のオペラ座）のコラーリ Coralli 作バレエ・オペラ『誘惑』 *La Tentation* でアスタロト Astaroth（悪魔の王）を演じた。また、シモン氏 Simon も『誘惑』で Ditakan デイチカン（悪魔）を演じた。モンジョワ氏が初演の時にアスタロトを演じた時の衣装のエッチングの電子版が Gallica に収録されている。黄金色のパンツ、浅黒い肌、そして頭には黄金色の円形の角、背中には濃いオレンジ色の二つの羽、背丈よりも長い杖が強烈な印象を与えている。
- (12) *La Presse*, Lundi 5 octobre 1840. PL. I, pp. 675-676.
- (13) Marie-Alexandre Alophe, *Le diable amoureux*, 3^{ème} acte, scène de la séduction, 1840.
- (14) *La Presse*, Lundi 1er juin 1840. PL. I, p. 560.
- (15) *La Presse*, Lundi 5 octobre 1840. PL. I, p. 675.
- (16) 注5のバレエ『悪魔の恋』のプログラム
- (17) PL. I, p. 1735. デエー Deshayes が台本を担当し、アダン Adam が音楽を担当したバレエ『ファウスト』は1833年にロンドンのキングズ・シアターで上演された。しかしその後の事は現時点では調査できなかった。注（5）で引用した『バレエダンス事典』の「ファウストを題材にしたバレエ」（p. 426）及び *Oxford Dictionary of Danse* の《Faust ballets》（p. 163）を参考にした。
- (18) *Faust, tragédie de Goëthe*, nouvelle traduction complète, en prose et en vers, par Gérard, Paris, Dondey-Dupré, 1828は Gallica で電子テキストを入手することができる。なお実際には出版されたのは1827年であると推定されているが、フランス国立図書館のカタログには1828年と記載されている。本書には「ファウストがメフィストフェレスと契約書にサインをする」図絵が収録されている。また *Faust de Goëthe, suivi du Second Faust, Choix de Ballades et poésies de Goëthe, Schiller, Burger, Klopstock, Schubart, Kærner, Uhland*, etc. traduits Par Gérard, Paris, Gosselin, 1840も Gallica に収録されている。以下『ファウスト』のこの本を Faust-1840 と略す。ネルヴァルの『ファウスト』訳は Goëthe, *Faust et le second Faust*, Paris, Bordas, coll. 《Classiques Garnier》, 1990と Goëthe, *Faust*, Paris, Flammarion, coll. 《GF》, 1964も参考にした。
- (19) Faust-1840, p. 52. ゲーテ『ファウスト 悲劇第一部』手塚富雄訳、中央公論社、中公文庫、昭和49年とゲーテ『ファウスト 第一部』池内 紀訳、集英社、1999年を参考にした。手塚氏の訳では「六頭の馬の代をわたしが払ったら、その馬の力はずまりわたしの力じゃないですか。そいつらに駆けさせりゃ、こっちはりっぱに二十四足のある男だ。」（pp. 128-129）。池内氏の訳では「六頭の馬が買えるとなると、その馬力もこちらのものだ。ヒラリととび乗って駆け出せば、二十四本の脚のある男ってわけだ」（pp. 84-85）。ネルヴァル訳と両氏の訳を比較すると、ネルヴァル訳があ

まり正確ではなかったことがわかる。

(20) Faust-1840, p. 271. 注 (18) で紹介したクラシック・ガルニエ版にも『ファウスト伝説』が収録されている (p. 321)。巻末の注には原著者とフランス語訳者についての履歴が詳しく書かれている (pp. 371-372)。注 (19) で紹介した『ファウスト』池内氏訳の巻末に池内 紀「解説 『ファウスト』第一部 — その楽しさ」が収録されている。「『ファウスト伝説』のつたえるところでは、ファウストは悪魔と契約した。契約には期間がつきのものであって、伝承のおおかたが二十四年としている。(中略)ゲーテはひろく流布したファウスト伝説を下敷きにしたが、契約は採用しなかった。ファウストは悪魔と期限つきの契約など交わさない。」と明解な文章で説明している(p. 253)。『ファウスト博士 付 人形芝居ファウスト』松浦純 訳、ドイツ民衆本の世界 Ⅲ、国書刊行会、1988年の「民衆本 実伝 ヨーハン・ファウスト博士」「人形芝居 ヨハネス・ファウスト博士」及び「解説 ファウスト博士 — 物語の誕生 松浦純」も参考にした。

(21) Faust-1840, p. 276. クラシック・ガルニエ版では p. 326.

(22) Faust-1840, p. 271. クラシック・ガルニエ版では p. 321.

(23) Jacques Cazotte, *Le Diable amoureux, roman fantastique*, précédé de sa vie, de son procès et de ses prophéties et révélations par Gérard de Nerval, illustré par Édouard de Beaumont, Paris, Ganivet, 1845. 以下本書を *Diable-1845* と略す。本書の現物入手し、多数の挿絵が掲載されていることを確認した。中でも注目すべきは、すでにⅡで述べたカゾット『悪魔の恋』1772年初版本に収録された7枚の絵(実は元の図版とは違う)と新たに収録された多数の図版が共存していることである。7枚の図版のうち、元と少し違うのが2枚、左右が逆は4枚、楽譜は全く違う。ネルヴァルの序文の後に6枚の絵が掲載されている。楽譜は8章に掲載されている。現物とは別に電子テキストも入手した。「著者の前書き」の随所と本文の随所に図版が掲載されている本と『悪魔の恋』本文の随所に7枚の図版が収録されている本がある。製本を依頼した人の指示などにより、図版の位置は変わってしまう。Gallicaは1845年版の電子化はまだ行っていない。

本のクラブ社 (le club français du livre) は1951年にジャン・リッシェ Jean Richer の研究論文と注を付けて復刻版を販売した。本書では問題の6枚の図版の位置は「著者の前書き」の後にまとめて収録されている。本のクラブ社は1968年にリッシェの研究論文と注なしの復刻版も出版した。

Jacques Cazotte, *Le Diable amoureux, roman fantastique*, précédé de sa vie, de son procès et de ses prophéties et révélations par Gérard de Nerval, illustré par Édouard de Beaumont, Paris, Plon, 1871 (Gallicaより入手。廉価版も入手) には6枚の図版は収録されていない。楽譜は本文に収録されている。これはネルヴァルの死後出版されている。

(24) *Diable-1845*, p. XXX. Gérard de Nerval, *Œuvres complètes*, tome II, Paris, Gallimard, coll. 《Bibliothèque de la Pléiade》1984, p. 1089. 以下この巻を PL. II と略す。1845年版とプレイヤッド版との間に文章の差はない。この箇所を訳す際に『ネルヴァル全集 Ⅳ 幻視と綺想』筑摩書房、1999年に収録された入沢康夫訳『幻視者 あるいは社会主義の先駆者たち』を参考にした。

(25) PL. II, p. 1748. *L'Infante de Zamora*, comédie en quatre actes, Paris, Duran Neveu, 1781 (Gallica

から入手). 表紙には台本作家のニコラ・エチエンヌ・フラムリー Nicolas-Étienne Framery が記載されていないが、音楽家パジエッロ Paisiello は書かれている。

(26) PL. II, p. 1743. 『絵入り有益予言年鑑 1847年版』 *Almanach prophétique pittoresque et utile pour 1847* の出版に関してはプレイヤッド版には出版は1846年と書かれている。この雑誌の電子テキストを見ると、挿絵画家としてガヴァルニ Gavarni、ドーミエ Daumier、トリモレ Trimolet、ヴェルニエ CH. Vernier、ジュフロワ Geoffroy、ドゥヴィー Devilly の名前が記されている。かなり著名な挿絵画家を揃えたと言っても過言ではない。

(27) Gérard de Nerval, *Les Illuminés*, Recits et portraits, Paris, Victor Lecou, 1852と書かれている。Gallica から入手した。PL. II, pp. 1709-1710も参考にした。

(28) エチエンヌ・アラゴとカミーユ・ロジエ (ネルヴァルの友人で画家) との関わりは、間瀬玲子「ネルヴァルとカミーユ・ロジエの絵画」『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要』第7号、2012年1月、pp. 65-75で論じた。

(29) *Le Diable amoureux*, comédie-vaudeville en 1 acte, Paris, Magasin théâtral, 1836. 現時点ではフランス国立図書館は本テキストを電子化していない。そこで Bayerische Staatsbibliothek, Münchener Digitalisierungszentrum Digitale Bibliothek から電子テキストを入手した。所有している本の電子化であることを確認した。

(30) 《Théâtre national du Vaudeville, *Le Diable amoureux*》, *Le Monde dramatique*, 1836, p. 282 (Gallica から入手).

謝辞：本研究は JSPS 科研費25370391の助成を受けたものです。

(ませ れいこ：英語メディア学科 教授)